

【論文】

1881 年ポグロムに関する資料の分析 (4)

黒川 知文



図 1881 年ポグロム発生地 (ロシア語表記)

拙著『ロシア社会とユダヤ人』ヨルダン社 2003 年、107 頁

内務省。ヘルソン県知事から。1881 年 6 月 24 日第 1879 号。ヘルソン。内務大臣殿へ。

閣下には以下ご報告いたします。まずエリサヴェトグラード市において、その後、ヘルソン県のいくつかの場所において発生した反ユダヤ騒乱は、キリスト教徒のユダヤ民族に対する興奮状態と、農民の間に広まっていた「これらの騒乱は政府自身が望んでいるものだ」という噂話から生まれたものである。騒乱の鎮圧と将来の発生防止を目的として行った騒乱時と騒乱後の県内巡回の際に、私は、自ら直接に、及び、貴族指導者と農民担当職員、さらに、村や市の住民の間に信頼と尊敬を得ている私の知人を通して、住民と接触し、彼らの心を静めることに尽力した。これは、閣下の 5 月 6 日及び 23 日付の通達を受け取る前のことである。そして、この通達を受け取った後に、私は、再び貴族指導者と地方議会の代表者のところに赴き、政府や地方行政府が行う住民の教育及び彼らの精神安定の働きに協力するよう求めた。最近いくつかの場所を自ら訪問した際に得た見聞と、至る所から頻繁にとどく報告をもとに、今回、私は、確信をもって次のように結論できる。すなわち、「ヘルソン県の全域において見られた住民の興奮状態は鎮静化した」ということ、また、「この興奮の目的だけではなく、その規模そのものも、もっぱらユダヤ人によってでっちあげられた噂と風評によりかなり誇張されていたものであった。ユダヤ人がこのような噂を流したのは、これによって彼らの居住地に軍隊を派遣してもらうためであった。また、さらに、地主たちに警戒心を起こさせて、彼らが自分たちの財産と生命を守るために相当な手段を講じてくれるよう、自らの立場から請願を出すように仕向けるためであった」ということ。これらの噂は、いかなる調査も、いかなる批判的評価も経ずに、幾千もの口を通じて広がり、ユダヤ人の間だけではなく、地主……とくに、農民たちの恨みを買っている恐れがある人々……の間にも危機

の念を生み出したということに疑念の余地はない。また、すべての大きな村落において、未開発な村落においてはなおさら、悪人や悪意の人々が2、3人見受けられるのが常であり、彼らは、このような噂を実行に移す傾向が強い。しかし、そのような噂によって引き起こされた危惧の念は、読み書きのできる農民たちの大多数の気持ちの中では実際にはいかなる基盤も持たないのである。彼らは、当局や地方自治体の代表者たちの説明を聞いて、すぐに心から「私たちは、どのような騒乱でも起こす気はなかったし、今でもない」と言うのである。このような発言が真実のものであるかどうかは、農民たちが当局の命令にことごとく従っていることや、騒乱が許されないことであるだけではなく、犯罪とみなされて罰せられるという事実になんて納得した時から、県内のいかなる場所においても平静を破ることがないということからも確証されるのである。これらのデータや考えから判断すると、確信をもって「農民たちの間では秩序や平静は十分に保たれている」と言うことができるのである。

この点に関して、都市部については、さらに大きな疑いが残るのである。都市部の労働者階級の人々とよそからやってきた人々の間では、きわめて危険なグループが形成されつつある。彼らが、秩序全般の破壊に傾けば傾くほど、警察力によって抑えることは難しくなる。ヘルソンの一部を除き、ヘルソン県のすべての都市において、警察の人員はまったく不足している。下級警官の数は少なく、質の面においても必ずしも満足のいくものではない。このような状況のゆえに、警察官が動いても、かえって回りに負担を与えるものとなっており、たとえ彼らが非常に熱心に働いた時ですら、期待される結果を出せないことが時折ある。しかし、これまでの騒乱や、つい最近の不穏な空気ゆえに、秩序や平静を保つ努力が払われている場所では、郡部・都市部を問わずすべての地において、警察力が利用されているのであり、現在のところ、これらの努力は、他の手段を併用しながら、すべて成功しているのである。しかし、これや、すでに試みられた他のすべての方法とは別個

に、私は、現在、閣下の6月3日付の通達を受け取った後に、再び、貴族代表者や地方自治体代表者のもとに行って、不退転の気持ちで住民に影響を与え続けて欲しいと要請している。また、ヘルソンとオデッサの大主教には、「村民と近い関係にいる教区聖職者たちにこの問題について協力を要請して欲しい」と依頼した。閣下にはさらに「オデッサ臨時総督殿によって要請された過去の反ユダヤ騒動に関する報告と詳細な説明については、それらを閣下にもお伝えした」ということを申し添えます。(Ll. d. 106-107)。

第 177 号

内務省。オデッサ臨時総督。1881年6月21日、第358号。オデッサ市。秘。ニコライ・パヴロヴィッチ殿。

私が得た情報から判断すると、私が任されている地方を走る鉄道の駅付近において、ユダヤ人の集団が群れ集まっており、彼らのうちの相当数は、非法な手段によって生計を立てている。例えば、旅行客の鞆の置き引きや盗品の隠匿と横流し、無許可の商取引、犯人隠匿行為にたずさわり、自分のけしからぬ振る舞いによって回りの住民から憎しみを買っているのである。住民たちは彼らの有害な行為から自分の身を守ることができないでいる。このような個人が、特に大きな中央駅の付近に滞在していると、彼らは同類の有害な分子を呼び寄せる状態にあるため、自ら住民と駅の鉄道労働者たちから制裁・・・例えば、ズナメンカ、ロゾヴァヤ、ジメリンカ、ヴォロチスカ駅のユダヤ人に加えられた襲撃など。ズナメンカ駅では、労働者たちは今まで、ユダヤ人が借りている家屋を放火するぞと脅かしてきた一中略。このことを考慮し、私は、彼らのうちで最もあくどい者たちを原籍地に送り返すために、私が管轄する県の知事と市長に対して、村や町に住所を持たず、鉄道駅

のすぐ近くに滞在しているユダヤ人の名簿を提出するように要請する必要があると考えた。この名簿には、彼らの本籍地が記されており、生活の様子や職業が詳しく記され、その罪や行動、地方自治体の法令に対する違反のゆえに裁判を受けさせるよう指示が載っており、刑罰についても記されている。この私の処置について閣下には報告いたします。敬具。ドンドゥーコフ・コルサコフ公。(Ll. d. 110-111)。

第 178 号

ポルタヴァよりペテルブルグの内務大臣への電報。7 月 1 日付第 号。

本日午後 5 時にペレヤスラフにて、ユダヤ人に対する襲撃が発生。いくつかの家の窓が壊され、ユダヤ人との喧嘩が発生。26 人が逮捕された。人に関して不幸な事態はなかった。不穏な事態。軍隊が召集。今、私は、ペレヤスラフに向けて出発する。県知事ビリバソフ。欄外に内務大臣イグナチエフの指令『軍隊の使用回避を望む』が記されている。(L. d. 114)。

第 179 号

ポルタヴァよりペテルブルグの内務大臣への電報。1881 年 7 月 11 日付第 48 号

警察署長より電報あり、ペレヤスラフの騒乱が夜 12 時に再発し、ある場所において鎮圧された。県知事ジューコフの代理。(L. d. 115)。

第 180 号

ハリコフよりペテルブルグの内務大臣への電報。1881 年 7 月 2 日付第 389 号

ポルタヴァ県知事より、本日、ペレヤスラフから以下の報告あり。当地での騒乱は続いており、主に、ユダヤ人側が主導している。軍隊の増強を続行している。騒乱を助長するキリスト教徒もしくはユダヤ人を全員排除するよう続けて命じた。控訴院の検事は、犯人を軍事法廷に速やかに引き渡すべく、至急調査を実行した。スヴィヤトポリク・ミルスキー公。(L. d. 118)。

第 181 号

ペレヤスラフよりペテルブルグの内務大臣への電報。1881 年 7 月 3 日付第 142 号

一昼夜の間、どこにおいても平静が乱されることはなかった。検事と警察署長の間の同意に基づいて、6 月 30 日に逮捕された彼らの知人である家長たちは、警察の監視の元に置かれた。本日、管区裁判所検事が到着。166 の家屋において窓ガラスが割られた。これらの家屋のうち 6 軒において家具や他の物が破壊された。私は、現在の騒乱の原因となったキリスト教徒とユダヤ人の市民の間の異常な関係を取り除くために、委員会（委員長：貴族代表、委員：地方自治会代表、市長、警察署長など）を開く必要があると判断し、そして、この地において設立した後、イリインスカヤの縁日を開くためにポルタヴァに出る。県知事ポリバソフ。(L. d. 119)。

第 182 号

ペレヤスラフよりペテルブルグの内務大臣への電報。1881 年 7 月 2 日付第 64 号

ペレヤスラフでの騒乱は、もっぱらユダヤ人に対する憎悪から生まれたものである。騒乱は主に、ユダヤ人の主導で続いており、私のいる前で、10 人ほどのユダヤ人が逮捕された。ユダヤ人の 2 つの家から銃が発砲され、これにより群衆はますます興奮した。集まったキリスト教徒たちは、もう暴動や騒乱は起こさないと約束したが、信用できない。県知事ビリバソフ。(L. d. 120)。

第 183 号

リュボチンよりペテルブルグの内務大臣への電報。1881 年 7 月 14 日付第 114 号

ペレヤスラフ郡のいくつかの地方において、反ユダヤ騒動が再発した。ポルタヴァ県知事は、次のように伝えている。ボリスポリにおいてユダヤ人の家屋 30 軒が破壊された。群衆は、憲兵士官を殴打した。彼と警察署長の身を案じたコサック兵が、武器を使用せざるを得なくなり、群衆の中で 4 人が死亡し、2 人が負傷した。これによって騒乱は鎮圧された。どんなにこの事件が悲惨であろうと、「民衆の横暴を抑制するためには、もっとも精力的で抑圧的な手段を講じる必要があり、これ以外に効果的な説得の手段は存在しないということ」を認めなければならない。私は、ペレヤスラフ郡の軍事力を強化するよう措置を講じた。本日ポルタヴァにおいて縁日が開かれるため、県知事はポルタヴァにいたる必要がある。そのため、ポルタヴァ県副知事が現地に出発した。スヴィヤトポリク・ミルスキー公。(L. d. 124 1)。

第 184 号

ポルタヴァよりペテルブルグの内務大臣への電報。1881 年 7 月 13 日付第 1432 号

昨日、ペレヤスラフ郡ボリスポリにおいて、ユダヤ人民家 30 棟が破壊された。ペレヤスラフ警察を助けるために派遣された、クレメンチュクスキー警察署長、憲兵士官、地元の郡警察署長、30 人のコサック兵たちでは抑えることができなかった。群衆は、憲兵士官プレチュコ、警察署長、元士官だった者たちを殴り、彼らから飾緒をはぎ取った。彼らを救ったのは、コサック兵たちであった。武器が使用された。群衆の中で 4 人が死亡し、2 人が負傷した。これにより、騒乱は鎮圧された。警察署長は、当地に 50 人のコサック兵を送るよう手配した。ベレザニ村において昨日、騒乱が発生し、20 人のコサック兵が派遣され、警察署長補が現地に向かった。総督に御願ひする。ペレヤスラフ郡の軍隊を増強されたし。現地に県副知事が向かっている。県知事ビリバソフ。(L. d. 126) B

第 185 号

ポルタヴァよりペテルブルグの憲兵参謀長への電報。1881 年 7 月 13 日付第 1467 号

ペレヤスラフ郡ボリスポリにおいて、ユダヤ人襲撃あり。昨日、憤怒した群衆が説得しようとした警察署長、コサック士官、副官プレチュコに殺到した。コサック兵により、彼らは救われた。プレチュコは、飾緒をはぎ取られ、バールで背中を殴られたが、軽傷だった。詳細は郵便にて。イリンスカヤの縁日に備えて、現場を離れることはできない。連隊長バニン。(L. d. 124)。

第 186 号

ペテルブルグ。電報長へ。ハリコフより電報。1881 年 7 月 14 日付第 4475 号

昨日、ペレヤスラフのスキツカヤから、『南部』編集長の名で下記の内容の電報第 427 号を受け取った。「昨日 7 月 12 日、ボリスポリ及びベレザニ村において暴動が発生。ボリスポリでは 30 軒以上のユダヤ人家屋が破壊された。30 人のコサック兵は、何もしなかった。群衆は、鎌や手鎌、継手ボルト、杭で武装していた。群衆の間から叫び声が上がった。『皆殺しにしろ。正午に地主とユダヤ人を殺せ。』憲兵副官プレチュコ、2 人の聖職者、警察署長ツリコフが襲撃された。群衆は継手ボルトや杭で襲った。

〈注〉1：リスト 121 と 122 が欠落。編集部。

ボリスポリにやってきた大尉ヴォイツェホヴィッチと陸軍中尉カメンスキーは、発砲を命じ、4 人が死に、2 人が負傷した。その後、ボリスポリでいくらか秩序が回復した。軍隊が必要。総督に電報が提示された後で、住所にとどける許可を得た。今日付の『南部』に次のように書かれてあった。「ペレヤスラフで起こった騒乱は、ボリスポリとベレザニ村に移った。ボリスポリでは、約 30 棟のユダヤ人家屋が破壊された。秩序を立て直すために、軍隊が投入された。説得を尽くした後で、ついに武器が使用された。この際に、4 人が死亡、2 人が負傷した。秩序は回復した。」さらに、ペレヤスラフから、もう一つの電報第 440 号が、ベケルの名前で、カプランを經由してとどいた。「差し当たり、万事うまく行っている。軍隊は十分である。悪い噂が流れている。」総督は、この電報を住所：第 280 号にとどけることを許可した。・ ・ エルン。」(L. d. 129)。

第 187 号

ペテルブルグ。『声』編集局。必読。写し。ペレヤスラフからの電報第 426 号、1881 年 7 月 16 日付。

ボルタヴァ県知事によって、ポグロムの際に逮捕され、釈放された 60 人の人々は、村々に散った後に、事実上、「ユダヤ人への略奪と殺害には罰が伴わない」ということを証明した。その結果、郡においてすべてのユダヤ人が破滅に追いやられたのである。ペレヤスラフのユダヤ人は、毎時間、さらにひどい襲撃が再開されるのではと怯えている。この電報を公表してください。最高首脳部に注意を払っていただきたい。ユダヤ人の生命と財産を守るために实际的対策を講じていただきたい。それとも、我々は、怒れる群衆の犠牲にでもなれと？ ヴリフ・フィンケリシュテイン、エヴゼル・フィンケリシュテイン、ズィノヴィイ・リフシツ、バル・ゲエロニムス、イズライル・ベンジツキー、ベンツィオン・ナイジス、アヴラム・フィンケリシュテイン、ヤンケル・ベルマン、ダヴィド・カガロフ。(L. d. 131)。

第 188 号

ハリコフ総督へ。

電報を受け取り、閣下に報告した。平静を回復するためには、精力的かつ实际的な対策を講じることが不可欠であるが、予防策を取ることもさらに重要である。受け取った報告によれば、前回、県知事は、群衆の要請に応じて 60 人の逮捕者を解放するという寛大な措置を取った。この措置により、人々は、ユダヤ人へのポグロムは許される行為であると確信するようになった。また、それは、彼らを凶々しくし、衝突をもたらした。[この措置が]どの程度妥当であったのか調査を願う。1 (L. d. 133)。

第 189 号

(回答は 50 単語で支払われた) ペテルブルグ・・内務大臣閣下へ (直接手渡し)。ネジンからの電報第 109 号 1881 年 7 月 8 日付。

7 月 3 日に閣下に提出した、キーエフ警察幹部及び手工業者指導者の不正に関する要請がすぐにとどかないのではないかと心配している。

〈注〉1: 電報全体が暗号文字によって暗号化されていた。編集者は、この不正によって、破滅に至らしめられたのである。この要請をご覧いただき、ユダヤ人をキーエフから追い出すことをしばらく中止し、すべての非合法行為を停止するように願う。ベンツィオン・カプルノフ。(L. d. 138)。

第 190 号

伯爵イグナチエフ内務大臣閣下へ。チギリンスクの町人ベンツィオン・シュムレフ・カプルンより。要請文。1

私は、後述するキーエフのユダヤ人の自伝を読んで、閣下にご迷惑をおかけしなければならないと強く感じた。本年 4 月 26 日及び 27 日にキーエフ市において発生した騒乱の後、政府も含めすべての人に、ユダヤ人がどの程度被害を受けたかが明らかになった。この後、キーエフ市のユダヤ人住民は、突然彼らを襲ったこの不幸な出来事の後にキーエフ地方当局が我々を冤罪の被害者、もしくは、もっと適切な言い方をすれば、けっして破滅に追いやられてはならない人々とまで見るようになった。しかし、問題はそれでは終わらなかった。上記のポグロムに加えて、キーエフの警察当局が、一時的に、手工業者を含むすべてのキーエフに住むユダヤ人を精力的に追い出したのである。その際に次の手段が取られた。キーエフ市に数十年暮らし、毎回身分証

明書を申請していたすべてのユダヤ人住民から、警察自身が身分証明書を要求し始めたのである。身分証明書の期限が過ぎたが新しいのを受け取っていないユダヤ人に対して、警察は、「ただちに、家族全員を連れて歩いてキーエフから立ち去れ」と命令した。家族には、多数の中年男女や非常に幼い子供たち、さらに、病人までもが含まれていた。身分証明書の期限がまだ切れていないユダヤ人に対しては、警察は、身分証明書の上に文言を記し、3日の期限を切ったすべてのユダヤ人は、当局の命令を実行しなければならないと判断し、その期間内に家族全員を引き連れて、やはり歩いてキーエフから退去した。さらに言えば、一体誰の命令によって、また、一体どのような論拠によって、キーエフ市の手工業管轄庁が、ユダヤ人手工業者全員を調べようと思ったのか、私は知らない。この役所は、何年前に自ら彼らに対して所定の許可証を発行したのであり、この間、ユダヤ人手工業者は、副職長を雇って、毎年かなりの額の税金を払い続けていたのである。このため、手工業管轄庁は、すべてのユダヤ人手工業者からすでに与えていた許可証の返却を執拗に求めた。音楽家や製パン職人、料理職人、他の手工業者を完全に消し去り、彼らを単純労働者にするために、手工業管轄庁は対策を講じた。その際に、この役所は、あたかも彼らが手工業についてまったく知識がないかのように見なし、彼らに試験すら行わなかった。この役所は、現在まで、これらの人々を自分の仕事について専門家であることをしっかりと認識していたのにもかかわらず、である。例えば、1875年10月17日付のキーエフ手工業管轄庁の命令第345号によりバイオリニスト試験の試験官と認められたバイオリニスト　ハイム・レイバ・ハレモフスキーは、この役所の通達により、職長補に選出するから宣誓するようと呼び出された。試験を受けた人の中で、一人のユダヤ人職人が、役所によって、多くのロシア人職長補を部下に持つロシア人職長からテストを受けるために派遣された。これらのロシア人職長補たちは、彼を熱烈に持ち上げて、次のように叫んだ。「さあ、ユダ公をテストしよう」と。哀れなユダヤ人職長の幾人かは、3、4日ごとに行われるロシア人のこのような試験に耐え抜き、彼らに与えられた課

題を見事にクリアしたが、いかなる報いもなかった。これらの期間、彼の家族は運命の恣意に翻弄されたのである。一言で言えば、キーエフ地方当局の庇護は、毎日考え出された新策により拡大していった、エジプトにおけるファラオのそれよりもはるかに大きかったと言えるのである。

閣下。次の点についてご考慮願います。1. 我々は、ロシア臣民である。2. 我々は、ロシア人臣民と同様に、当然の義務をしっかりと遵守している。3. 我々は、キーエフ市のギルド等の団体納付金を、他の階層以上に、多額に納めている。4. 本年4月15、16日にエリサヴェトグラードにて、26、27日にキーエフ及びその郊外において、また、キーエフ県外では5月に発生したポグロムの後に、ポグロムに遭った者は言うに及ばず、例外なくすべてのユダヤ人が、きわめて堪えがたい破滅状態と困窮の中にある。5. ユダヤ人のうち、少なからぬ者が、生命の危機に瀕している。6. キーエフ市追放により、ユダヤ人は、路上の真ん中で餓死するほどの災難に襲われている。7. 私は、この件について、本年5月27、29日に、2通の電報を閣下宛に送ったが、まったく返事がなかった。8. キーエフ県知事宛の1879年6月11日付第4368号の内務省通達及び、1880年4月3日付再通達第30号では、次のようにはっきりと記されている。すなわち、「当該の件について内務省からの特別命令が出ない限り、貴殿の管轄される県から、居住権がないことが判明したユダヤ人を追放することはまかりならぬ。」と。また、閣下は、人間愛をお持ちであり、困窮にある人に助けを与える慈愛心をお持ちなので、我々をあわれみ、慈愛の目で我々をご覧になることを願う。閣下の足下に平伏し、閣下の御加護を期待申し上げつつ、以下の措置を講じていただくことを願い奉るものである。A) 内務省の特別命令がないうちにキーエフからユダヤ人を追放する措置を講じた者に中止の命令を出すこと。B) キーエフにおいては、『キーエフ人』という名前の新聞の編集者がおり、毎日、自分の新聞の全面にわたって、反ユダヤ的感情をかき立てるフレーズと記事を掲載している。この新聞の読者は、みな、「相手がユダヤ人であれば誰に対して

も反ユダヤ的行動を行ってもよい」と信じ込まされている。我々の現在の危機的状況を考慮し、『キーエフ人』の編集長が、このような新聞を発行しないように命令を出していただきたい。この危機的な状況により、我々は、キーエフから出ることはまったく不可能であり、毎日生き延びていくための手段が完全に奪われている状態なのである。閣下が私の願いを無視されることなく、キーエフ市警察局を通じて、その慈愛に富む決定を通知していただくことによって、私に幸いを与えてくださることを期待申し上げます。これに関して、私は、敢えて閣下に次のことをご通知申し上げます。すなわち、私がこの件に関わり、閣下にご面倒をおかけするのは、私が、昔からキーエフ市に住み、高齢になり（80才）、しかも、まったく貧困の状態になってしまった現在、私は不快な無一文の身で死ぬ以外にはなく、このために、私を追いかけている死が私を襲う場所を探すために放浪せざるを得ないからである。私の意見では、これこそ、私をこのことに駆り立てている本質的な原因である。ヘブライ語での署名。ロシア語で、「チギリンスク町民ベンツィオン・シュムイロフ息子カプラン。1881年7月2日、キーエフ市。」という意味。（L. d. 139-140）。

第 191 号

キーエフ県知事。1881年7月18日第4307号。

キーエフ市に住むチギリンスク町人ユダヤ人ベンツィオン・シュムイロフ・カプレンから要請あり。要請文の中において、地元の警察が、ユダヤ人をキーエフから追い出すために強硬な手段を講じているということが示されており、カプレンは、この措置を中止し、新聞『キーエフ人』を禁止するよう求めている。このため、本局は、閣下に対し、彼の要請に対しては結論が出ていない旨カプレンに通知するようお願い申し上げます。副局長ユゼフォヴィッチの署名。（L. d. 142）。

第 192 号

ペテルブルグ市電報局より。憲兵隊施設。1881 年 7 月 17 日付電報第 号。
暗号。モスクワ。内務大臣宛。

13 日チェルニゴフ県オステル郡において小規模のユダヤ人騒乱が発生。政府情報局編集部に、モスクワからフルシチョフの電報がとどいた。これを印刷すべきか、指示を請う。勅任文官チェレヴィン。(L. d. 143)。

第 193 号

ペテルブルグ市電報局より。憲兵隊施設。1881 年 7 月 21 日付電報第 号。
暗号。モスクワ。内務大臣宛。1. コストロマ、2. ニジニノブゴロド、3. リービンスク。

県知事へ。大臣に以下報告願う。昨晚、ネジンにて、ユダヤ人騒乱が発生。軍隊により秩序は回復した。軍隊は、武器を使用し、5 人が死亡、1 人が負傷した。本日、再び民衆の間に興奮状態が現れた。勅任文官チェレヴィン。(L. d. 144)。

第 194 号

電報 ペテルブルグ。内務大臣元老院議員ゴトフツェフ殿。ネジンより。
1881 年 6 月 22 日付第 466 号。

ネジンの問題について貴殿が尋ねられたことについて、県知事が私に伝えて

きた。私が、ペテルブルグに電報を打たなかったのは、一日にいくつかの電報を私から受け取っていた総督がすべてについて省に伝えていると考えたからである。現在、平静が回復した。プリルカより軽騎兵中隊2個とバトゥリンスク旅団から歩兵大隊が到着したばかりであるが、昨日は夕方ころ、昼の3時、夜に、混乱や暴動が、多くの地点において同時に発生した。それは、地元の大隊が拡散されたのと、規模が小さかったためである。この大隊には、全部で200の兵員しかなかった。物質的損害はそれほど大きくなかったが、混乱は大きなものであった。軍隊は、2度発砲し、その際、群集が彼らに襲い掛かった。9人が死亡し、4人が負傷した。私は昨日夜7時に到着したが、騒乱はすでに鎮圧されていて、群集が四散してできたいくつかのグループの人々と話すことができた。酔っ払いはおらず、怒りは激しかった。しかし、個人的に自分に対する敵意とは出会わなかった。調査が始まった。何かが起こりそうなコノトブに向かう。県の南部全体が大きな不安の中にある。特別なことがあれば、直接省に連絡する。県知事ショスタク。(L. d. 145)。

第195号

電報 ペテルブルグ。内務大臣へ。ネジンより。12881年7月23日付第592号。

コノトブとネジンは、軍隊の到着により平静である。ネジン郡で騒乱が始まった。ドレマイロフカでは夜に、チェルニゴフの道路において、ユダヤ人の家屋が破壊された。現地に軽騎兵中隊を派兵する。自身はチェルニゴフに

帰る。——ショスタク。(L. d. 146)。

第 196 号

電報 ペテルブルグ。内務大臣殿。ハリコフより。1881 年 7 月 23 日付第 4465 号。

ネジンにおいて騒乱が発生したと同時に、鎮圧のために断固とした手段が捕らえられた。軍隊は、武器を使用せざるを得ず、群集の中で幾人かが死亡及び負傷した。昨晚の県知事の報告によれば、ネジンにおいて平静が取り戻された。騒乱が再発する様子は見えない。ユダヤ人が住む他の地点において秩序を保つために、可能な限りのあらゆる手段を講じている。スヴィヤストボルクーミルスキー公。(L. d. 174)。

第 197 号

電報 ペテルブルグ。内務大臣へ。チェルニゴフより、1881 年 7 月 24 日付第 892 号。

ネジン警察署長から次の内容の電報が届いた。「ネジンはまったく平静である。噂話も止んだ。ユダヤ人は商売をはじめた。壊されたものを修復するように説得している。発見された財産を警察にもってくるよう、太鼓を鳴らし

て布告している。聖職者たちに、民衆を説得するよう要請している。」県知事ショスタク。(L. d. 149)。

第 198 号

ペテルブルグ。国家警察局長へ。モスクワからの電報。1881 年 7 月 22 日付第 62727 号。

現在、キーエフ署長ドロホトフ大佐より電報あり。ネジン市及び、クルスコ・キーエフ鉄道ネジン駅付近においてユダヤ人家屋 28,20,37,66,53,18,32,37,53,30,37,。49,32,53,30,14,24,17,67,24,57,39,20,61,32 が破壊された。1 ドロホトフは、この件について、総督に電報を打った。局長代理コシンスコイ少将。(L. d. 151)。

第 199 号

ハリコフ臨時総督。1881 年 7 月 18 日付け第 1074 号。ハリコフ市。内務大臣殿。

ベレヤスラフ郡にて再発した民衆の騒乱を鎮圧するために私がとった措置に

関して7月15日に閣下へ送信した電報の補足として、私は、以下ご報告いたします。この措置は、主に、県当局が地元の状況を考慮し、騒乱を鎮圧するのに必要不可欠であると感じている措置を実行するのに必要な大きな手段を提供するためである。かくして、私はペレヤスラフ郡の現地部隊を増援する目的で、歩兵中隊6個とコサック騎兵中隊2個を派遣した。また、県当局が必要を感じた場合、部隊の兵員をさらに増強すべきであると提言した。これと同時に、私は、県知事に対して、「もし他の手段では平静を取り戻すことができないと判断した場合には、抑圧的な手段を取ることに躊躇してはならず、そのために、きわめて精力的に行動すべきである」と勧めた。また、「もしその存在が社会の安寧にとって有害であると判断されるキリスト教徒やユダヤ人がいたら、彼らを郡から遠ざけることも必要である」と進言した。

これとは別個に、私は、ポルタヴァの県知事だけではなく、チェルニゴフの県知事に対しても、「騒乱を予防するためには、迅速かつ精力的に、そして、けっして動揺することなく行動して欲しい」と要請し、彼らが自分の裁量で導入することができる次のような予防措置を提示した。1. 惑わされている人々への説得工作。2. 興奮状態にある地域において酒類販売時間を制限する。3. 騒乱の教唆扇動にあたっていると見られる容疑者を有名な地域に住まわせない（騒乱防止及び鎮圧に関する法令第1条補則）。4. 容疑者の逮捕。5. 軍隊の分散配置。ポルタヴァ県知事に対して、私は、ポリスボレに駐留している軍隊の移動にかかる費用を有罪住民に負担させることを許可した。最後に、ペレヤスラフ郡において発生した騒乱をめぐって開始された調査の早期終結に向けてあらゆる手段が講じられた。侍従武官長スヴィヤストポルク・ミルスキー公。(L. d. 153-154)。

チェルニゴフにいる県知事ショスタクからの暗号電報。1881 年 7 月 25 日付。

〈注〉1：暗号は分析されていない。編集者。

The Analysis of the Materials on 1881 Pogrom (4)

Tomobumi KUROKAWA

ABSTRACT

The purpose of this paper is to analyze the historical materials, *Материалы для истории антиеврейских погромов в России* (Materials for Anti-Jewish Pogroms in Russia), and to describe the pogroms in Ukraine in 1881. The materials were published by the Russian government in Petrograd in 1919 and 1923, covering the pogroms between April and September in 1881. The materials are consisted of the two parts; the first part is of the official reports on the pogroms by the provincial governments to the central government, the second part is of the reports by count P.I.Kutaisof, sent by the central government to examine the pogroms in Ukraine. He describes the pogroms almost chronologically not only from governmental view point but also from the general public view point.